

佐保姫

昔、大地の北の森の中に一つの国があり、佐保彦と佐保姫の二人の兄妹がいた。妹の佐保姫は神の声を聴く者で、兄の佐保彦は妹が聴いた神の意思を民人に伝えた。神はいつの年も、この国の民に豊かな収穫をもたらした。

ある年の春、佐保姫のもとに一人の若者が訪れた。若者は隣国の王で名をイクメイリヒコといった。若者は妻問いのために佐保姫に会いに来たのだと告げた。

佐保姫は驚いた。自分に妻問いをするものが現れるなどとは考えたことがなかったからである。

若者は王にふさわしい気品と凛とした美しい声を持ち、沢山の光り輝く玉をその身体につけていた。佐保姫は心の高揚を抑えて若者に言った。

「私は神の言葉を聴くものです。神は私と、私の民人に災いをもたらすことは言わない。だから私は神の言葉を聴かねばならないのです」

そう言うと、一人、神の山に向かった。その夜は風が起こり、鳥達が騒いで、神が山の頂に下りたことを人々に知らせた。次の日、館に戻った佐保姫は、頭に花飾りをつけ、美しい刺繍のある衣装を着ると、兄王の佐保彦に、「隣国の王は、兄王に栄光を与え、民人達に豊かな恵みを与えるものです」と、告げた。こうして、佐保姫はイクメイリヒコ王の後となった。



一年が経ったころ、佐保彦が佐保姫の元に来てこう言った。

「王は私と、私の民人を苦しめている。私は王と戦わなくてはならない。そなたは王に従うか、それともこの私に従うか」

それを聞くと、佐保姫は悲しみの涙を浮かべ、兄王に従うと約束をした。

「それでは、王を殺し、お前と私の二人でこの天の下を治めよう」

と言うと、佐保彦は紐飾りの付いた小刀を佐保姫に握らせ、

「これで、王が眠っているところを刺せ」と、佐保姫の耳に囁いた。

佐保姫の心は揺れた。そして幾夜かの眠られぬ夜を過ごした。眠られぬ彼女の耳に「殺せ、殺せ」と囁きかける佐保彦の声が蘇った。

佐保姫は兄から渡された小刀を隠し持つと、王のスキを伺うようになった。

或る日、王は佐保姫がそのような企みを抱いているとは知らず、愛しい佐

保姫の膝を枕にして昼寝をした。

今こそ神が与えた好機、こう思うと佐保姫は懐から小刀を取り出し、三度、王の首を刺そうとしたが、その都度、哀しい心がわきあがるのを抑えることが出来ず、首を刺すのをためらっているうちに、涙があふれて王の顔に落ちた。王は驚いて飛び起きると、佐保姫に尋ねた。

「私は妖しい夢を見た。夢の中で雨が降ってきて私の顔を濡らした。それから気が付くと、錦の蛇が我が首に纏わりついていた。これはいかなる験であろう」

その言葉を聞いて、佐保姫は今までのことをすっかり王に打ち明けた。

王は直ちに軍勢を率いると、佐保彦を撃つためにサホに向かった。佐保姫は王に攻めたてられている兄王と民人たちのことを思うと、悲しみを抑えることが出来ず、こっそり王宮を抜け出すと、佐保彦が立て籠もる稲城に逃げ込んだ。

佐保姫は、どうして王を刺さなかったのかと問う、兄王に答えて言った。「私はイクメイリヒコ王の子供を宿しております。どうして、母となる私にその父親を殺せましょう。でも私は兄王に従うと約束しました。だから私はこうしてこの稲束の城にやってきたのです」

王は佐保姫が稲城に逃げ込んだのを知って、攻めるのを躊躇っているうちに佐保姫は王の子を生んだ。男の子であった。姫は子供を抱いて稲城の外に出、王の元に行くところ言った。

「この子は王の御子でございます。私を愛しいと思ってくださいますなら、この子をお育て下さい」

王は佐保姫に、そなたは戻ってきてはくれぬのかと聞いた。

「私は王と、兄王を裏切りました。ですから稲束の城で滅びるのが、私の定めでございます。しかしこの子は、王の御子として生きてゆかねばならないのです」

そう言うと、佐保姫は再び稲城に戻って行った。

王は総攻撃を命じた。

燃え上がる城の中で佐保彦は佐保姫を見つめて言った。

「私はこの城で民人とともに滅びるのは、神の決められた定めだから仕方がないが、あの時、神はそなたに隣国の王はサホの民人に豊かな恵みをもたらすと、偽りの言葉を伝えられた。私は神に裏切られたのが残念だ」

「いいえ、神は私達を裏切ったのではないのです。あの時、神は隣国の王は私達に災いをもたらすと、私に言ったのです。でもその時、私は神の言葉を伝えるものではなく、只の人間、いいえ、只の女になっていたのです」